

真の勇者

士師記6章11～18節
2021年9月12日
松田 基子 師

勇者とは、どの様な人の事でしょうか。

『勇者とは、勇気のある者のこと。英雄と同一視され、誰もが恐れる、困難に立ち向かい、偉業を成し遂げた者』

と説明されています。人類の歴史は一面、そのような勇者によって困難、苦境を乗り越えて、今に至っていると言えるでしょう。聖書にも、モーセを初め、沢山の勇者が登場します。ところで私達は勇者と聞けば、何かその人、個人の、特別な資質の素晴らしさに目が行って、彼らは元々人間的資質や、能力が違うのだと思って、最初から、自分には関係の無い遠い存在だと思っているのではないのでしょうか。

しかし、それが、

『神様が私達に求めておられる
勇者の姿でしょうか。』

と言うのが今朝の問いです。一体真の勇者とは、どんな存在なのでしょう。今朝登場しますギデオンから、その事を考えて参りましょう。さて、モーセに率いられて、出エジプトを果たしたイスラエルの民は、神さまが先祖アブラハムに与えると約束された、カナンの地の入口まで、辿り着きましたが、約束の地に入れたのは、新しい指導者、ヨシュアに率いられた第二世代達でありました。しかし、その地と言うのは、偶像に汚染された先住民がいるところであり、彼らはそのところを勝ち取っていかなければなりません。それは紀元前千百年代の事とされています。

ヨシュアは12部族に、(その内、レビ族は主を嗣業として、各部族の中に遣わされて行きましたが)イスラエルが戦い取って行くべき土地の配分を行い、送り出して、110歳で召されていきました。その後の状態はと言いますと、先住民は平地に住み、鉄の戦車を持っている者達もいて、彼らと戦うことは、容易ではありませんでした。イスラエルは、そのために残された土地、山地、荒れ地に入り込んで行きました。

また、世代が変わって行くと、神さまからの厳しい律法に従って行くよりも、人間の本能に訴える、先住民の宗教と生活に魅力を感じる人々が多くなりました。そこで、神様は御使いを送って、士師記の2章1節から、

「わたしはあなたたちをエジプトから導き上り、あなたたちの先祖に与えると誓った土地に入らせ、こう告げた。

『わたしは、あなたたちと交わした、私の契約を決して破棄しない。あなたたちもこの地の住民と契約を結んではならない。住民の祭壇は取り壊さなければならない』と。しかし、あなたたちは、わたしの声に聞き従わなかった。なぜこのようなことをしたのか。わたしもこう言わざるをえない。」

「私は彼らを追い払って、あなたたちの前から去らせることはしない。彼らはあなたたちと隣りあわせとなり、彼らの神々は、あなたたちの畏となろう。」

との警告を与えられましたが、イスラエルはその神様の言葉に真剣に聞き従うことはありませんでした。

それでも神様は、イスラエルが危機に瀕し、助けを求めますと士師を送って助けられました。今朝登場するのは、士師の中でも有名なギデオンです。士師記6章1節を見ますと、

「イスラエルの人々は、主の目に悪とされることを行つた。主は彼らを7年間、ミディアン人の手に渡された。」

とあります。イスラエルの人々は、主の目に悪とされることを行つたと言いますのは、

『偶像礼拝に浸った。』

という意味です。イスラエルに土地が与えられたという事は、そこに定着して、農業が出来るという事です。農業の目的は、その土地から豊かな産物を得ることです。先住民たちは豊かな産物を実らせてくれるという、豊穡の神々を拜んで、実際多くの産物を得ていました。

自分達も、あの様に豊かになりたい。そのためには、彼らが拜んでいる神々を拜めば良いに違いない。イスラエルの民は自分達が、戦い取った土地から、豊かな産物を得たい。そのためには、先住民の神、バアルとアシュラの夫婦

の神を祭るべきだと考えてそれぞれ一族の地所の中に、バアルの礼拝所を建てたのでした。

神様はこのイスラエルの背信に対して、遊牧と略奪の民、ミディアン人達が、イスラエルの領地に侵入して来ることを、許されました。イスラエル人が種を蒔き、苦勞して育て、収穫を目の前にしますと、ミディアン人は、アマレク人や、東方の諸民族と共にやって来て、農産物ばかりか、大事な家畜である羊も、牛もろばも、全て奪い取って行ったのでした。

ミディアン人は遊牧民ですから、天幕を携えて、家畜を養いながら、牧草地を移動するのですが、それに合わせて、略奪して周りました。5節を見ますと、

「それはイナゴの大群のように、人もらくだも数知れなかった。」

とあります。彼らはらくだを乗り回すことができました。らくだは砂漠の機動力です。

『当時に於いては迅速、大量に略奪出来た。』

と言うことです。

それもイナゴの大群のように、食い尽くして、何も残しませんでした。

イスラエル人はそんな略奪から、少しでも免れようと、洞窟や洞穴や要塞に、食糧や貴重品を隠しました。そんな状態が7年も続いたので、6節を見ますと、

「イスラエルは、ミディアン人のために、甚だしく衰えたので、イスラエルの人々は主に助けを求めて叫んだ。」

とあります。

神様はその彼らに対して、一人の預言者を送って、彼らの罪を明らかにされました。預言者はイスラエルの人々に向かって、8節に、

「イスラエルの神、主はこう言われる。

わたしはエジプトからあなたたちを導き上り、奴隸の家から導き出した。わたしはあなたたちをエジプトの手からだけでなく、あらゆる抑圧者の手から救い出し、あなたたちの赴く前に彼らを追い払って、その地をあなたに与えた。わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちはアモリ人の国に住んでいても、

アモリ人の神を畏れ敬ってはならない、とわたしは告げておいた。だがあなたたちは、わたしの声に聞き従わなかった。」

とイスラエルの罪を示しました。

アモリ人と言うのは、カナン先住民のことで、イスラエル人は、先ず自分達の神様への背信、罪の重さを、しっかりと自覚すべきでした。しかし、その罪の深さに気付かず、現状を嘆いている人がいました。神様の目は、その人に止まりました。神様はその人の許に御使いを送られました。御使いはマナセの領地のオフラと言う土地に、生い茂っている聖木とされていた、樅の木に似た、テレビンの木の下にやってきて座りました。

地所は、アビエゼル族の中のヨアシュのものでした。彼の末の子が、ギデオンでした。彼はちょうど酒船の中で、小麦を打っていたところでした。酒船と言うのは、ぶどう園の片隅に設けられた、葡萄を踏みつぶす場所で、一般的には2㎡位の広さだそうですから、畳1枚を一回り大きくしたくらいの狭いものです。何故そんな狭いところで麦打ちをしていたかと言いますと、それは勿論ミディアン人の略奪から逃れるためでした。

御使いは、そのギデオンのところにやって来て、

「勇者よ、主はあなたと共におられます。」

と挨拶しました。ギデオンは御使いを旅人だとも思ったようです。ギデオンは、この人なら、きっと日頃の思いの丈を聞いて貰えると思ったようです。丁寧に、

「わたしの主よ、お願いします。主なる神がわたしたちと共においでになるのであれば、なぜこのようなことがわたしたちにふりかかったのですか。」

「先祖が、

『主は、我々をエジプトから導き上られたではないか。』

と言って語り伝えた、驚くべき御業はすべてどうなってしまったのですか。今、主はわたしたちを見放し、ミディアン人の手に渡してしまわれました。」

と訴えました。

ギデオンは、神様の御心が分かりませんでした。いくら、先祖たちに目を見張る様な奇跡が起こされたと聞かされても、現実には自分達の内に、何の助けもありません。それでも神がおられると言うのなら、神様は自分達を見放しておられるに違いないと考えたのです。今日でも、同じような考えに陥る事はよくあります。聖書には、癒しの奇跡が沢山出ているのに、私の病は何故、癒されないのでしょうか。ギデオンも同じような考えでした。この様な思いを抱える事は、誰にでもある事です。それは奇跡が起きる、起きないの問題ではなく、神様への信頼が無いと言うことです。

神の**勇者の条件**は、神様への、**全き信頼**です。神様のギデオンへの憐れみは、神様への全き信頼に至っていない、ギデオンを神様に信頼して行く者へと、変えて下さる事です。真の勇者とは、その人の持っている資質、能力ではありません。神様がその人との信頼関係を築いて下さり、そこに神様の力が現れて、神様が**勇者として立てて、御業を現して下さる**ことです。ギデオンはそのプロセスを、一步一步踏んで勇者に育てられて行った人です。

御使いは最初に、ギデオンに、
「あなたは勇者」
と宣言して、勇者への道を歩ませました。
14節に、
「主は彼の方を向いて言われた。
『あなたのその力をもって行くがよい。
あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか。』」
と言われました。ギデオンは自分では、今まで考えても見なかった言葉に、
「私の一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です。」と、
『自分に、そんな大それたことは出来ない。自分には、そんな力は無い』と、
尻込みをしています。自分を見詰めたなら、だれも勇者にはなれません。

そんなギデオンに、神様は16節で、
「わたしがあなたと共にいるから、あなたは

ミディアン人をあたかも1人の人を倒すように打ち倒すことができる。」

と約束されました。ギデオンは語られた言葉を信じたいと思いました。そこで、ギデオンは、17節で、

「もし、お目にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだというしるしを見せてください。どうか、わたしが戻って来るまでここを離れないでください。供え物を持って来て、御前におさげしますから。」

とたのみました。御使いは、

「あなたが帰って来るまでここにいる。」

と約束しました。

ギデオンは大急ぎで家に帰り、子山羊一匹を調理し、麦粉1エファ(約230)で、酵母なしのパンを焼き、肉汁を用意して、この様な大きな供え物を持って御使いのところに帰ってきました。ギデオンが供え物をささげると御使いは、それらを岩の上に置き、杖の先で供え物に触れました。すると、岩から、火が燃え上がり、肉とパンを焼き尽くしてしまいました。それと同時に、御使いは消えて見えなくなりました。ギデオンは、そこで初めて、この人は主の御使いであった事を悟りました。

それが分かったと、ギデオンは主の御使いに直接会うことは、死を招くとの言葉を思い出して、急に不安に襲われました。その心を見られた神様は、23節で、

「安心せよ、恐れるな、
あなたが死ぬことはない。」

と憐れみを掛けて下さいました。ギデオンは、早速そのところに祭壇を築いて

『平和の主』

と名付けました。ギデオンの神様に対する信頼が固まって行きます。ギデオンが神様に信頼し、御言葉に聞き従おうとの決心が出来ると、神様から6章25節で、

「あなたの父の若い雄牛1頭、すなわち7才になる第二の若い雄牛、」

(牛は農耕に使いますが、2頭を一枚の板の軛(くびき)でつなぎます。その若い方の牛を「第二の牛」と呼びました。)

「その牛を連れて、父の地所に立てられている、バアルの祭壇を壊し、その傍らの柱棒を

切り倒せ。」

との命令です。偶像神は、人間の考えた物ですから、人間の延長線上です。神も夫婦で立てられていました。バアルは古代、パレスチナの神で、主人(土地の所有者)を意味しました。豊作をもたらす神とされ、配偶神、アシェラも豊穡の女神で、多くの場合、丸太が立てられていました。バアルの祭壇を壊して、新しくヤハウエの祭壇を築いて、雄牛の犠牲を献げるのですが、その時アシェラの丸太を切り倒して、薪にするというのです。今日の私たちには、有効利用に思われますが、周りがバアル礼拝に染まっている中で、それを決行することは、大変な勇気が要ることでした。

そして、何よりも、それはヤハウエの神、**主なる神が共におられる**という、**信頼**が無ければ出来ることではありませんでした。ギデオンは主が共におられる事を確信しつつも、周りの反撃を恐れ、夜、僕10人に手伝わせて、この事を決行しました。案の定、この事は皆に知られるところとなりましたが、父のヨアシュは、

『バアルが神なら、自分の祭壇が

壊されたのだから、自分で争うだろう。』

と人々を納得させました。父ヨアシュは、そのことから、ギデオンをエルバアル(バアルは自ら争う)と呼びました。

さて、再び収穫の時期が巡ってきて、ミディアン人、アマレク人、東方の諸民族が皆結集して、ヨルダン川を渡り、肥沃なイズレエルの平野に陣を敷いて、略奪の構えに入りました。ギデオンは6章36節で、神様に対して、

「もしお告げになったように、わたしの手によって、イスラエルを救おうとなさっているなら、羊1匹分の毛を麦打ち場に置きますから、その羊の毛にだけ露を置き、土は全て乾いているようにしてください。そうすれば、お告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっていることが納得できます。」

とお願いしました。すると神様は、そのように応えて下さいました。それでも、ギデオンは、まだ全信賴することが出来ず。真逆のしるしを求めました。

神様はそれにも応えて下さったばかりか、彼の不安を取り除くために、ミディアン人の兵士が、ギデオンによって攻撃を受けると言う夢を語る会話を、彼自身、その耳で直接聞く様にされました。そこからは、ギデオンは神様に全信賴して、従いました。集まって来た兵士 32,000 人を、神様は、

『多すぎる』

と言って、僅か 300 人にまで減らされた事に対して、ギデオンは一言も反論せず、ただ御言葉に従い、神様の御業を確信して、その勝利を勝ち取り、勇者と呼ばれるに相応しく、成長しました。

真の勇者は、人間の資質、能力によるのでは、ありません。神様に全信賴して、神様の御言葉に心から信じて従う人のことです。神様はそのために、神様に疑問を投げ掛け、徴(しるし)を求める者を、決して退けられることはありません。**問題は、私達が本気で、神様に賭けて信賴し、聞き従って行くかどうか**です。私達もそのような信仰の勇者となる事を求めて、神様に、更に信賴を強め、よく祈り、御心を聞き分ける信仰に、導いていただくではありませんか。

お祈りをいたします。

愛と深い配慮に富んでおられる天の父なる神様

あなた様は、人類の真の幸せしか願わず、その様に導いておられるにも拘わらず、ご自身を疑う、この罪をお許してください。そのような私たちに、なお、私に全信賴せよと、私たちの求めに耳を傾けてくださり、有難うございます。

あなた様に全信賴し、御言葉に聞き従う事に依って、主の御業、栄光を現す者としてください。私たちを、そこに真の勇者としての姿を、求める者とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。